

観察1：木曾三川公園P3駐車場（立田橋西詰北側）

観察2
カニ採り

観察3

出船

七里の渡し跡

よみがえれ長良川

2020.9.27 Sun

長良川下流域環境観察会

観察指導：千藤 克彦 先生（元長良川下流域生物相調査団員）

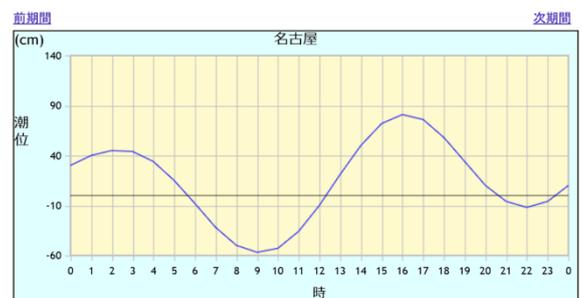


2020/9/27 長良川下流域環境観察会の報告

今年の観察会は、コロナ禍で5月開催を断念し、9月27日に開催しました。湿地のグリーンウェーブの位置づけは変わりません。観察指導は元長良川下流域生物相調査団の千藤克彦先生。秋晴れの下、参加者は13名でした。

水辺に入って良く観察できるのは干潮時です。この日は干潮が午前10時頃となりますので、木曽川の水辺観察から始めました（河口堰のある長良川は常時満潮位より高い水位で一定）。

毎時潮位グラフ 名古屋
2020年9月27日の潮位予測



注意
・ グラフの縦軸は潮位、横軸は時刻を示しています。
・ 潮位は標高(単位:センチ)で表示しています。

木曽川右岸・木曽三川公園(河口から約14km)のワンドの水辺観察

立田橋西、木曽川右岸の岸辺で観察。ここは かなり大きなワンド(湾処)になったところ。ヨシ原が広がり長良川では今では見られなくなったサンカイ、マコモなどの多様な植物が見られます。小さなベンケイガニやモズクガニ、イトメなどが観察できました。千藤先生のお話では、これらの数えきれないほどのイトメやゴカイ、カニなどは他の生き物の食べ物になるだけでなく水質を浄化する働きをしている。かつては、新月の夜に、年に一度だけ川面を埋め尽くすほどのイトメの産卵の様子を観察できたが、河口堰ができて2年目には長良川からは姿を消してしまったとのこと。



長良川・揖斐川背割堤(河口から9.8km)を挟むヨシ原でカニの観察

毎年(昨年は雨でカニ採取は中止)比較観察する場所で行いました。それぞれの岸辺で3分間カニを採取しました。

揖斐川ではクロベンケイガニ、ベンケイガニ(赤い)を小さなものから大きなものまで38匹採取できました(ベンケイ雄22・雌13、クロベンケイ雄1・雌2)。

長良川では僅かアカテガニ雌1匹でした。

カニは6月頃水辺で産卵し、その幼生が引き潮に乗って海域に達し、そこで成長し、上げ潮によって河川感潮域に着底します。潮の流れが堰で遮断され、淡水となっている長良川では生育できません。長良川では今まで少ないながらもかなり大きな4~5センチのカニを採集できました。しかしここ数年クロベンケイガニ、ベンケイガニが採取できなくなっており、一昨年もアカテガニが1匹採集できたただけでした。千藤先生の観察ではこの地点より少し下流側の長良川の岸辺の樹木ではアカテガニが多く見られるようです。

アカテガニはかなり広範囲に陸上移動するといわれています。それに比べクロベンケイガニ、ベンケイガニの移動範囲は狭い。今まで千藤先生は、長良川の背割り堤以外で採取した大きなカニは揖斐川から背割り堤を越えて長良川に侵入して、それが移動してきたものではないかと考えていました(千藤説)が、山内先生は堰閉鎖以前に棲み着いていたものの生き残りだと考えました(山内説)。真偽のほどは、2015年から2017年に行った調査で、背割り堤以外の場所の大型のカニが完全に姿を消したことで、山内説が正しいことが明らかになるとともに、河口堰によって自然界でのベンケイガニの寿命が2、3年だということも明らかになりました。



午後は、船に乗り河口堰周辺の河床、ヨシ原の観察をしました。

河床の観察(河口から4.0km)

今年7月の異常降雨・出水で河口堰全開が頻繁だったようで、今まで観測したことのないような砂が被っているようで、典型的なヘドロは採取されませんでした。上げ潮で水深が3.7mでしたから、河床はTP-3.5より高

いようです。堰運用開始時は浚渫したばかりでしたので TP-6.0 でした。

揖斐川 河口から約 4 km
水深 4.5m 水温 22.0°C
底質はサラサラした砂
酸化還元電位+200mv

長良川 河口から約 4 km (堰下流側)
水深 3.7m 水温 22.0°C
底質は粘土を含んだ黒っぽい砂
酸化還元電位-180mv



強い風と上げ潮がぶつかって白波が立っていました。

河口堰直上流 (河口から約 6.5 km) のヨシ原観察

今年 7 月の度重ね押し寄せた洪水で根こそぎ流し去られたようです。点状のヨシ原群落が消滅していく状況でした。まさに風前の灯火です。想像以上のダメージです。

山内・古屋先生の下の報告の通りです。



洪水による倒壊 (長良川左岸 9km 地点、2010. 6. 28. 大雨出水時の河口堰ゲート開放時)。矢印は洪水時になぎ倒された株立ちヨシ。
「長良川河口堰湛水域におけるヨシ群落の死滅の原因」山内・古屋 2020/1/21 より

発着した「船着き場」はとても風情がありました

昨年から、七里の渡し跡近くの船着き場から発着しています。江戸時代の東海道・城下町の雰囲気が残っています。

桑名の街の歴史の話も聞けました。堀の両岸は城への出入り、遊郭の出入りとして賑わったそうです。



長良川のヨシ原の減少を指摘する千藤さん (奥) =三重県桑名市の長良川で

長良川河口堰の周辺環境を調査
岐阜の市民団体など
長良川河口堰(三重県桑名市)が本格稼働後の長良川と周辺環境を調べる観察会が二十七日、同河口堰周辺であった。
岐阜、愛知両県の市民団体でつくる団体「よみがえれ長良川実行委員会」が十年ほど前から実施。例年は春に実施しているが、新型コロナウイルスの影響で開催を延期していた。
長良川下流のカニや水辺の植物の種類を研究する千藤克彦さん(五)が参加者を案内した。並行して流れる長良川と揖斐川(河口から十*地点)で、カニの生息数を比較。五分間探した結果では、圧倒的に揖斐川の方が多いことを確認した。その後船に乗って河口堰に近づき、ヨシなど水辺の植物が年々減っているとする千藤さんの話を耳を傾けた。

た。
参加した岐阜市の公務員杉村鎮右さん(四)は「河口堰のない揖斐川と見比べると、今の長良川はパワーダウンしているのではと感じた」と話した。(藤原啓嗣)